

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(11)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月27日に行われたウィーン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Kronen Zeitung
February 29, 2020
Mus

カティア・ブニアティシヴィリの「スロー」

NHK交響楽団は1926年に東京で創設された日本で最も古いプロ・オーケストラだが、ヨーロッパ公演では首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィのもと、カティア・ブニアティシヴィリが独奏を務めた。最初に演奏されたのは日本の響き、武満徹の1991年の作品《ハウ・スロー・ザ・ウインド》である。受け入れやすい現代音楽である。あたかもドビュッシーの牧神が桜の木の下で瞑想しているかのような響きである。真率に演奏されたオーケストラのウインドはとて「スロー」である。しかしながら、カティア・ブニアティシヴィリのベートーヴェン《ピアノ協奏曲 第3番》第1楽章が独奏後にグランドピアノからラルゴ(largo)を穿鑿するかのようなスローモーションであったのに比べれば緊張感があった。彼女の過剰なスピードでバラバラに崩れた第2楽章と、それに反して月並みな打鍵スピードの練習であるかのような第3楽章もこれを補うことはできなかった。

これに続くブルックナー《交響曲 第7番》はひとつの挑戦だった。しかし、思慮深いパーヴォ・ヤルヴィの指揮の下で、ややゆるいが実直な弦楽器が結束しても木管と金管楽器がこれだけ急に下降すると、ブルックナーはオーケストラの罨となってしまう。